

8. 三木町における婚姻儀礼

今市恵里

- I はじめに
- II 婚姻儀礼の形式とその変遷
- III 考 察
- IV おわりに

I は じ め に

私はこれまで、最近の婚姻儀礼は日本全国どこでも同じようなものだと考えていた。しかし、今回三木町での調査を進めるにしたがって、結婚式場で行われている結婚式や披露宴自体は他の地方と変わりがなくとも、それに至るまでの過程には、三木町独特のしきたりがあるということが判った。しかし、昔からの儀礼を百パーセント忠実に受け継いでいるという訳ではないようである。そこで、次節ではまず三木町の戦後の婚姻儀礼の形式とその移り変わりについて詳しく述べ、続く節で変化の要因及び、なぜしきたりにある程度したがって儀礼を行うのかということについて考察することで、三木町の人々にとっての婚姻儀礼の意味を考えてみたい。

II 婚姻儀礼の形式とその変遷

三木町では結婚の話がまとまるとまず、新郎とその両親が、一升酒（手打ち酒、たもと酒）とするめを持って新婦の家に行く。そして新郎新婦とそれぞれの両親が、その一升酒を開けて冷やで飲み、するめをあぶって食べる。この慣習は昔からあまり変わっていないようである。

次に結納が行われる。午前中に新郎側の人間が、結納品とお土産を持って新婦の家に行き、新婦の家または別の会場を設けて昼食を一緒に食べる。新郎だけが行く場合や、新郎は行かずに男性の仲人と新郎側の親戚代表とが行く場合もあるが、普通は新郎とその両親、仲人の計5人で出かける。結納品は結納金の他に酒、するめ、友白髪、指輪、新郎家の家紋付き留め袖などで、それらは水引で飾り、床の間などに並べておく。

このあと新郎の家で「御神酒呼ばれ」を行う。三木町に住んでいる新郎の親戚を集め、新婦を披露する。新郎の家では一升酒、鯛の尾頭付き、まんじゅう、果物のかご盛りなどを用意する。このときは新婦側の家族や親戚は呼ばない。近所の人や新郎の父親の友人には折詰めとお酒を配る。現在行われている御神酒呼ばれは2時間ほどで終わるが、1950（昭和25）年頃までは、昼と夜と2回行われていた。昼の御神酒呼ばれは現在行われているものとはほぼ同じで、これが終わると新郎の親戚が村中に夜の御神酒呼ばれに来るよう言うて回る。このため、あわせて100人程度が集まったという人もいた。この夜の部にはお酒とつまみ、はっしょう鍋（豆腐などが入ったお

つゆ)などを用意する。御神酒呼ばれが昼夜2回行われていた頃は、この夜の部に来ることができなかった近所の人にだけ、折詰めとお酒を翌日持って行った。

もうすぐ結婚式という時期になると、新婦の家で「御歯黒祝い(やりあげ、女呼ばれ)」というものがある。これは新郎やその家族は呼ばずに、新婦の親戚のうち女性だけを集めて、嫁入り道具を見せる。招待された人は御神酒または御神酒料(現金)を持参し、新婦の家では、鯛の焼き物、おこわ、菓子箱、果物かご盛り、折詰めなどを用意する。戦前は女性が実際に歯を黒く染めていたことから、女性だけのこの儀礼に御歯黒祝いという呼び名がついたらしい。最近では、御歯黒祝いを行わない人が徐々に増えているようである。

御歯黒祝いが終わると、いよいよ嫁入り道具を運ぶ。結婚式の1週間前から前日までの間に、新郎の親戚2人が道案内のために新婦の家へ行き、新婦の親戚と共に嫁入り道具を運んで来る。ただ三木町の人同士が結婚することが多かった1950(昭和25)年頃までは、お互いの家を知っているので道案内の必要はなかった。またその頃は新郎と新婦の家が近かったことと、まだ自動車が普及していなかったこともあり、嫁入り道具は新婦の親戚が担いで徒歩で運んだが、現在では通婚圏の拡大と自動車の普及により、トラックで運ぶようになった。徒歩で運んでいたときもトラックで運ぶようになってからも、長持ち唄などの音楽を流すのだが、これは両家の近所の人に嫁入り道具が来たことを知らせるためであり、この音楽を聞いて嫁入り道具を見にきた人には、紅白まんじゅうを配る。新郎の家に着くと、嫁入り道具のなかで「えこ」という着物を掛ける道具(衣桁)をまず最初におろす。「えこ」と「いい娘(こ)」をかけて縁起を担ぐためである。その他の道具も決められた順番通りに並べて結婚式当日まで飾っておき、それを近所の人が見に来る。しかし最近では、嫁入り道具を運び入れる日以外に見に来る人はあまりいないようだ。加えて、最近増加している、結婚後に新郎の両親と同居しない場合には、嫁入り道具も新居に運ぶため、近所の人に見せたりまんじゅうを配ったりはしないことが多い。また『三木村志』によると、当時は嫁入り当日に提灯を灯して道具を運び、新郎の家では新郎の最も近い親戚の嫁が新婦を迎えたという。

現在の結婚式はほかの地域と同様、主に結婚式場で行われている。その場合まず、新婦だけまたは新婦とその両親が新郎の家に行く。そこで竹筒に入れてある両家それぞれの水を1つの杯に注ぎ、それを新婦が飲んでからその杯を投げて割る。この後神棚、仏壇の順にお参りし、新郎の両親にあいさつして結婚式場へ行く。

結婚式が、現在のように結婚式場や料理屋など、自宅以外で行われるようになったのは1970(昭和45)年頃からであるが、それ以前の結婚式は「嫁取り」と呼ばれ、新郎の自宅で行われていた。三木町のほとんどの家には「四本柱」の大きな座敷があり、普段は襖で田の字型に仕切っているが、嫁取りはこの襖をはずして行われた。嫁取りの日は、午前中に仲人が新婦を迎えに行き、新婦は打ち掛けなどの衣装を着て来る。新郎の家に着くとまず、現在行われているのと同じ

ように両家の水を混ぜて飲み、新郎と共に神棚、仏壇に参る。そして屏風で仕切った陰の間で、まず新郎と新婦が三三九度の盃を交わし、次に新郎の両親と新婦が仲人を介して三三九度の盃を交わす。この後「餅膳」で紅白のお餅を食べる。これが終わると、新郎は着物を着替えて台所で酒の燗などを始める。次に「本膳」で、近い親戚を集めて宴会をし、新婦はお酌をして回る。この後新婦も退席して、遠い親戚や近所の人も集めて簡単なごちそうをふるまい、夜明けまで酒盛りの宴を続けた。ただこの宴は徐々に夜までで終わらせるようになった。この間新婦は、衣装を着けたまま隣室に控えていて、必要に応じて時折顔を見せる。また、嫁取りがあると知り、新婦を見に来た近所の人にはまんじゅうを配る。このように新郎が裏方に回り、新婦が宴会の中心となることから、嫁取りも御神酒呼ばれと同じように、新婦のお披露目が主たる目的のひとつであったことが推測できる。

若連中の習慣があった頃は、結婚式当日には新郎の若連中は呼ばずに、別の日に改めて集めて宴会を開いた。

結婚式の直後または翌日、新婦の母親が新郎の母親に連れられて新郎の家の近所にあいさつをして回る。このとき新婦の名前入りの風呂敷を配る。これは新郎の近所の人に新婦の名前を覚えてもらうためである。

現在では多くの人が結婚式の後に新婚旅行に行くが、新婚旅行が普通に行われるようになったのも、1970年頃からである。新婚旅行から戻ると、新郎新婦は着物を着て近所にあいさつをしてまわり、お土産を配る。この後しばらくして落ち着くと、新婦は「ひと戻り」といって、実家に2～7日間ほど帰る。しかし最近では、若い夫婦が婿の両親と同居しない家が増えたため、この習慣が徐々に消えつつある。

1965年頃までは、結婚式の1～3か月後に「婿呼び（婿さ呼び）」が行われていた。嫁の実家に婿を招いてごちそうするのである。このときは、嫁側の男性の親戚と仲人を集める。しかし現在では、このように正式に婿を嫁の実家に呼ぶことはない。

これまで、三木町における戦後の一般的な婚姻儀礼の流れを見てきたが、第2次世界大戦直後の貧しい時代などは、婚姻儀礼も簡素化され、結納や御歯黒祝いなどの儀礼のうちのいくつかが省略された。また1945年頃までは、小作など貧しい人で、「箸取り」という儀礼を行う人もいた。この「箸取り」とは、新婦が新郎の家で初めて箸を取るという意味で、ごく近い親戚と仲人だけを集め、ちょっとした着物などを着て食事をした。箸取りは御神酒呼ばれ、御歯黒祝いの後に行われたが、これが終わってもまだ籍は入れず、共住もしない。そして子供ができると改めて嫁取りを行い、籍を入れた。この箸取りは現在では全く行われておらず、箸取りという言葉は知っていてもその内容は判らないという人も多い。

戦前から戦後すぐの1950年頃までは、多くの人が三木町内で婚姻関係を結んでいた。結婚適齢期の男女（男性25歳前後、女性20歳前）双方の親同士が相談して子供の結婚を決めていた。ほとんどが「婿探し」ではなく「嫁探し」で、男の方が仲人を立てて嫁探しを依頼し、仲人はまず三木町で、男の家の格などにふさわしい嫁を探し、三木町にいないければ近隣の村で見つける。当時は三木町内で結婚の相手が見つからないのは恥ずかしいことであり、あまり良く言われなかったそうである。このため、同じ三木町に住むいとこ同士で結婚する人もいたという。しかしその後三木町内で結婚する人の割合は低下していき、1955年以降はほとんどの人が三木町以外の人と結婚するようになった。それによって、婚姻儀礼も変化したと言えるだろう。つまり三木町内で結婚していた頃は、三木町の慣習にしたがって儀礼を行うことができたのだが、三木町以外の人と結婚するとなると、相手の居住地域が三木町近辺の場合は、儀礼慣行がそれほど変わらないこともあるが、しきたりが異なる場合は、三木町のやり方だけで婚姻儀礼を行うというわけにはいかなくなるというわけである。したがって、結婚相手の居住地域や価値観の違いなどにより、婚姻儀礼はそれぞれの場合に合わせて行われるようになったので、その変化の過程については一概には言えない。

しかし、三木町の男性の結婚式については、その大半がある程度三木町のしきたりにしたがって行われている。それは、一升酒に始まり、結納、御神酒呼ばれ、結婚式と、新郎側が主体となっていく儀礼が多いからである。三木町に嫁をもらった人でこれらのうちどれかを省略したという人はあまりいなかった。

逆に三木町の女性の場合、相手の男性の居住地域の慣習にしたがった婚姻儀礼を行い、三木町のしきたりでは新婦側で行うべき御歯黒祝いを行わない場合もある。

一つ一つの儀礼について詳しく見ていくと、まず一升酒は、儀礼そのものはあまり変わっていないが、その持つ意味が変化したのではないだろうか。つまり、三木町の人同士が結婚していた頃は、両家がお互いに顔見知りであり、親たちにとっては結婚の最終確認という意味があった。本人たちにとっては、単なる近所の人ではなく「結婚相手」として、双方が始めて正式に顔を合わせる場であった。しかし現在では通婚圏の拡大により、見合い結婚にしても恋愛結婚にしても、結婚を最初に、あるいは最終的に決断するのはほとんどの場合本人同士である。よって本人たちにとって一升酒という儀礼はあまり意味を持たない。だが両親同士は恋愛結婚の場合、一升酒が正式には初めて顔を合わせる場であり、見合い結婚の場合でも新しい親戚として初めて交流を深める場となる。

次に結納は、現在ではほとんどのケースで行われているようだが、戦後間もない貧しい時代などには、経費節約のために省略されることが多かった。これは三木町の人々の結納に対する意識の変化によるものであろう。昔は一升酒が正式な結婚の約束の場と考えられていたが、次第に他

の地域での慣習に影響を受け、一升酒に代わって結納がその役割を果たすようになったのではないだろうか。結納が一升酒に比べて重要度が低く、形式的なものでしかないと考えられていた頃には、結納品などお金がかかるこの儀式に必要性を感じなかったため、省略されることが多かったであろう。また、結婚式が嫁取りと呼ばれていた頃は、新郎側がその費用を全額負担していた。つまり一升酒から嫁取りまでの御歯黒祝いを除くすべての儀礼の費用を、新郎側が負担していたのである。一方新婦側は、嫁入り道具と御歯黒祝いの費用だけを用意すればよかった。しかし現在では、結婚式と披露宴の費用は、その割合に個人差はあるにしても、新郎新婦双方が負担しているため、新婦側は結婚式の費用も何割か準備しなくてはならなくなり、新婦側の負担が重くなった。そこで新郎側が結納金として、嫁入り道具の費用の一部を負担することで、釣合いが取れるということも、結納が一般的に行われるようになった一因であろうと考えられる。

御神酒呼ばれは、1950年頃までは昼夜2回行われていたが、それ以後は昼または夜に1回だけ、親戚内だけで行うというふうに簡略化された。これは通婚圏の拡大が原因であると思われる。三木町同士で結婚していた頃は、新郎家の近所の人には新婦の家にとっての知り合いでもあったため、二人の結婚を正式に知らせる必要があった。だが通婚圏の拡大によって、新郎家の近所の人を御神酒呼ばれに呼ぶ必要性がなくなったのだろう。それに加えて、全国的に見られるように、三木町でも近所付き合いが以前と比べて希薄になったということも関係しているのだろう。また最近では、御神酒呼ばれを行わずに折詰めだけを配る人もいるが、これは近所付き合いの問題に加えて、親戚が遠くに住んでいるということも原因であろう。

御歯黒祝いは前述の通り、最近ではこれを行わない場合がある。それは三木町から嫁ぐ女性が、相手の男性側の婚姻儀礼の慣習に合わせるということもあるが、もう1つの原因として、やはり三木町に住んでいる親戚が少なくなったということが挙げられるであろう。また、親戚に嫁いだ女性自身が三木町以外の出身である場合が増えたということも影響しているのではないか。

次に嫁入り道具を見に来る人が減ってきたことについては、近所付き合いの問題に加え、日本の経済成長に伴う娯楽設備の充実もその要因の1つではないか。昔は特に女性の生活に楽しみが少なく、近所の誰かが結婚すれば嫁入り道具を見に行くことが一種の娯楽となっていたのである。

自宅で行われていた嫁取りが、結婚式場などで行われるようになったのは、やはり第1にはしきたりよりも、いろんな面での便利さを選択した結果であろう。料理などの用意をする必要もなくなり、嫁取りが1日中かかっていたのに対し、結婚式場などでの結婚式は2時間程度で終わる。また嫁取りでは、主に新婦が新郎の親戚などとの交流を深めるという目的があったが、現在の結婚式には対話の場があまりない。このことから、親戚付き合いも近所付き合いと同様、重要度が低下しているのではないだろうか。

御神酒呼ばれや御歯黒祝いが少しずつ行われなくなっているのも、親戚を家に呼ばなくなっ

てきているということを意味している。それは、生業の変化によるものではないか。つまり、農業で生計を立てていた頃は、農繁期など困ったときは親戚や近所の人と助け合っていたが、農業が副業や趣味程度となり、会社などに勤めに出るようになると、親戚や近所よりも会社の上司や友人などとの人間関係の方がより重要になってきたのである。そこで結婚式も会社の上司や友人にとって、交通の便などが良い結婚式場で行うようになったのであろう。

また、結婚後の住居の問題も関わっているだろう。最近では長男でも結婚後は両親と別居するという人が増えているため、新郎の両親の家で嫁取りをするというわけにもいなくなり、かといって若い夫婦の新居には、嫁取りを行うことができるような大きな座敷がない。こういったいくつかの理由から、嫁取りは結婚式場で行われるようになったのであろうと考えられる。

婚姻儀礼全体の変化の要因に関しては、三木町の人々の結婚に対する考え方の変化が影響しているであろう。以前は、結婚はイエとイエとの結びつきであり、夫側の家が「嫁をもらう」と考えられていたが、最近では、結婚とは個人どうしの結びつきでしかないと考える人が若者（新たに結婚する世代）を中心に増えてきた。これは農業を生業としなくなったことで、イエを継ぐことの重要度が低下したためであろう。「嫁をもらう」と考えられていた頃は、もらう夫側のしきたりを優先したが、夫と妻が対等な立場として扱われるようになってからは、双方の慣習を融合させるなどして、三木町の婚姻儀礼は全国化していったのではないだろうか。

IV お わ り に

これまで見てきたように、三木町における婚姻儀礼は、生活習慣や社会環境、結婚に対する考え方の変化による部分的な変化はあるものの、三木町独特の慣習の大部分が受け継がれている。最近、娘の御歯黒祝いを行ったある人は、自分の家からしなくなったと言われたくないので、慣習通りに行ったのだという。しかし1996年に三木町が行った「マスタープラン」のアンケートでは、冠婚葬祭に伴う儀礼の簡素化を申し合わせることに、約80%の世帯が賛成している。つまり、婚姻儀礼を簡素化したいとほとんどの人が思っているが、近所の人を気にして、実際に三木町のしきたりを変えることができないのである。数年前、息子の結婚の時、御神酒呼ばれを省略した家族が、三木町に住む親戚や近所から型破りだと批判を受けたように、高齢者などで三木町の婚姻儀礼を変えることに反対している人がいるからである。現在と同様に、嫁取りを結婚式場で行うようになった時にも、批判や反対はあったはずである。しかし、時代の変遷に伴って高齢者など反対する人々の割合が低下し、今では自宅で嫁取りを行う人はいなくなった。このように三木町の婚姻儀礼は、従来のやり方を変えないでおこうとする志向と、新しいやり方を取り入れていこうとする志向とのせめぎ合いのなかで、これからも少しずつ全国化していくのではないだろうか。